

薬剤部 DI ニュース

Q1. 妊婦・授乳婦はインフルエンザワクチンの接種を受けてもよいでしょうか？

A1. 妊婦・授乳婦へのインフルエンザワクチン接種について、添付文書や海外の見解などをまとめます。

<妊婦>

添付文書	妊娠中の接種に関する安全性は確立していないので、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人には接種しないことを原則とし、予防接種上の有益性が危険性を上回ると判断される場合のみ接種すること（「妊婦、産婦、授乳婦等への接種」の項）
厚生労働省 Q&A	・不活化ワクチン ^{※1} は、胎児に影響を与えると考えられていないため接種不適当者に含まれていない ・妊娠初期：自然流産が起こりやすい時期のため接種は避けた方がよいと考えられている ・接種直後に妊娠が判明した場合：妊婦にワクチンを接種したことによる特別な副反応の報告はなく、また、妊娠初期に接種しても胎児に異常の出る確率が高くなったというデータもないことから、胎児への影響を心配して人工妊娠中絶を考慮する必要はないと考えられている
米国CDC ^{※2}	2004年、「妊娠期間がインフルエンザシーズンと重なる女性の接種」を推奨（2004年以前は、妊娠 14 週目以降の妊婦に対して推奨）
臨床報告	妊婦 319 人（平均妊娠 27.1 週）に接種を行ったところ、副反応が認められたのは 17 人（5.3%）で、インフルエンザ様症候群が 14 人（4.4%）、注射部位の発赤 3 人（0.9%）である。過敏反応、早産、他の重大な副反応は認められなかった ³⁾

<授乳婦>

添付文書	記載なし
厚生労働省 Q&A	不活化ワクチンのため接種しても支障はない。 〔不活化ワクチンは、ウイルスが体内で増えることもなく、母乳を介して乳児に影響を与えることはない。また、母親がワクチンの接種を受けることで乳児の感染予防を期待することもできない〕
米国CDC	授乳婦とその乳児に影響を及ぼすことはない。また、母乳を与えることは授乳婦の免疫反応に悪影響を及ぼすことはなく、接種は禁忌ではない
他の報告（母乳移行性）	極めて微量のワクチン成分が母乳中で検出されたという報告はあるが、乳児に悪影響を及ぼすとは考えられていない

※1: 不活化ワクチン—インフルエンザワクチンなどウイルスの病原性をなくしたワクチン

※2: 米国CDC—米国疾病対策センター（Centers for Disease Control and Prevention）

Q2. 複数のワクチンを同時に接種することは可能ですか？

A2. 通常の接種間隔[※]は、「副反応が起こるかもしれない時期を避ける」、「生ワクチン同士の場合、ウイルス同士の干渉や抗体反応によってワクチンの効果が上がらない恐れがある」などの理由からあけられています。複数のワクチンの同時（同日）接種は、日本では、接種回数を無理に少なくする必要性がほとんどないため一般には行われていませんが、海外渡航するなどの理由で医師が必要と認めた場合は行うことがあります。

接種する際は、同一部位への接種は避け、別々の腕などに接種することが望ましいといわれています。

※通常の接種間隔：生ワクチン接種後「27日以上あける」、不活化ワクチン・トキソイド接種後「6日以上あける」

定期的予防接種実施要領	2種類以上の予防接種を同時に同一の接種対象者に対して行う同時接種（混合ワクチンを使用する場合は除く）は、医師が特に必要と認めた場合に行うことができる * 医師が必要と認めた場合とは、「海外渡航前や移植前など時間的に余裕がない場合」という文献があります（一般的な接種法と異なることを説明し、同意を得た上で実施）
海外（主に米国）	多くのワクチンは同時接種を行っても「安全かつ有効」で、「接種もれが少ない、接種・受診回数の減少により経済的・時間的負担が軽くなるなどの利点がある」と推奨
効果（抗体反応など）	一般に生ワクチンの同時接種は、単味接種と抗体反応に有意差は認められず、ウイルスの増殖もほぼ同時に増殖することからお互いに干渉することはない（数日間隔では干渉する可能性がある）。不活化ワクチン同士、不活化ワクチンと生ワクチンの同時接種でも干渉しないと考えられている
副反応	同時接種によるワクチンの効果の減弱や副反応の増強は起こらないと考えられ、それぞれのワクチンで起こった副反応が総和されて見た目に強くなったように感じる程度といわれている